

1 地域を支えるケアボランティアの育成（エイズ治療に関する研修 フォローアップ）

■2013年9月 研修は女性トレーナー2名によって、レイプや性交渉、HIV検査のタイミングなど性に関わる微妙なこともオープンに話せる雰囲気の中で行われました。基礎研修より一年経過してからのフォローアップ研修だったため、一年前の研修を受けて見えてきたこと、活動のなかでの具体的な課題等を共有しながら、実践に即した形での研修が行われました。研修はDICボランティアと合同で行われています。

【右上】一年前の研修内容を覚えているか確認しながら実施。写真はHIVライフサイクル（感染経路など）。

【下】レイプ後の感染予防について説明するトレーナー。真剣に聞く参加者たち（右下）。

「薬の種類について学んだことで、患者たちが自分たちの病気に関して私にウソをつくことが難しくなりました。特にHIV/エイズとTBははっきりと区別ができるようになったのです」

～在宅介護ボランティア



（特活）日本国際ボランティアセンター

1 地域を支えるケアボランティアの育成（救急法研修）

10月22～24日の三日間で35名の訪問介護ボランティアを対象に救急法研修を行った。研修は実践を多く入れて行われた。



【左上】心臓マッサージを習っているところ。簡単そうに見えてやってみると難しい。【右上】のどに物を詰ませたときの対応。
【左下】包帯がないときでもアフリカ人女性にとって身近な「布」を使って骨折した腕を固定する方法。【右下】試験は実技方式で行い、全員が合格した。

（特活）日本国際ボランティアセンター

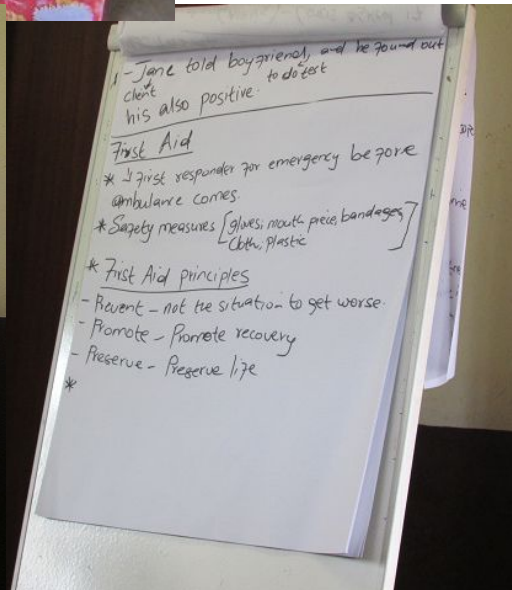
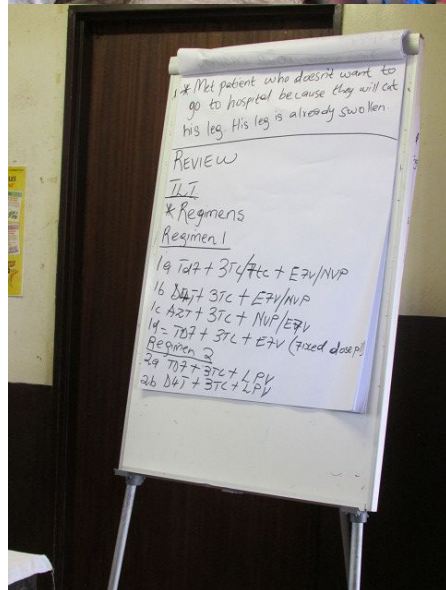
1 地域を支えるケアボランティアの育成（一年間の研修の振り返り）



2013年11月にHBCボランティアとともに振り返りを実施。家庭訪問による観察とワークショップによって知識の定着度合いや変化について確認した。

【左】患者の服薬状況について確認するボランティア。研修前はできていなかった。右側の写真は、クリニックにARV（エイズ治療薬）が足らず服薬を失敗している患者に対し、服薬中断の怖さを伝えつつ、別の医療機関への紹介状を用意するボランティア。家庭訪問では、活動開始前には実践されていなかったさまざまな変化が確認された。

【左下】村ごとに行ったワークショップで研修で覚えていることをあげてもらった。ほとんどのボランティアが非常に多くのことを、詳細に覚えていた。



【右】包帯がないときにアフリカ女性が日常的に使っている身近な「布」を使って骨折した腕を固定する方法を覚えていくか確認。



（特活）日本国際ボランティアセンター

2 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援（カウンセリング研修／フォローアップ）

第二回 4日目

- ・性的犯罪法、DV法、
- ・子どもの虐待の予防、早期介入、法的レファレンス方法、アフターケア

子ども保護法(Child Protection Act)に合わせ、性的犯罪法(Sexual Offense Act)、DV法(Domestic Violence Act)などで子どもたちがどのように法的に守られているのかを学びました。また、これらの法律の中そして南アフリカ内、コミュニティ内で子どもたちに提供されているサービスを考え、その中でDICがどのような役割を持つのかを改めて考えました。



【上】中心にいるのは母親を亡くし、おばあちゃんと暮らす子ども。この子がコミュニティの中から得られるサポートは？それぞれ、学校の先生、警察官、DICボランティアなどと役割とできるサポートをあげ、子どもを守るウェブが広がっていく様子を体験しました。

【右】子どもの虐待が疑われるとき、「予防」「早期介入」「法的レファレンス方法」「アフターケア」においてどのようなサービスが考えられるか、誰が責任者かを挙げていきます。



(特活)日本国際ボランティアセンター

2 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援（メモリーボックスづくり）

■メモリーボックスづくり(10月16～18日、DICボランティア13名参加)

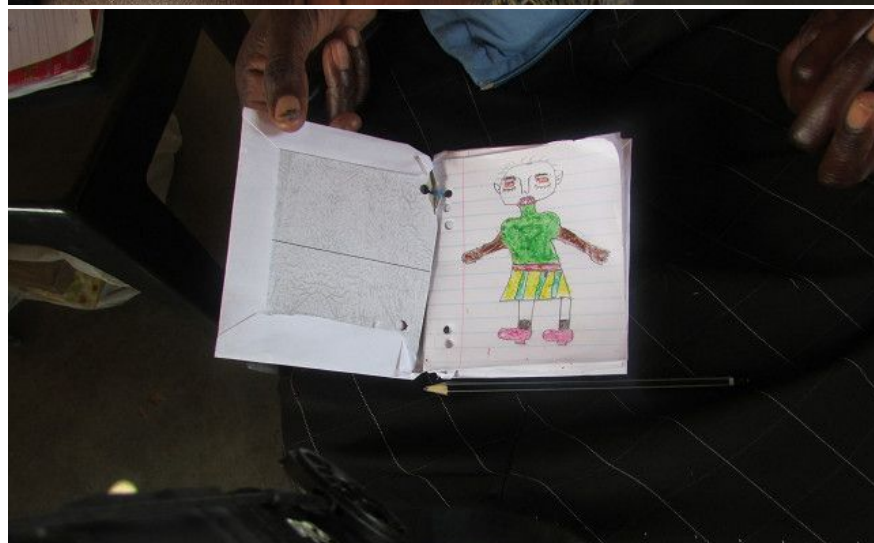
3月、7月に行ったカウンセリング研修のフォローアップとして、「メモリーボックス」づくりを行いました。「メモリーボックス」とは、大人が主に子どもたちのために自分が死んだ後に必要な情報を入れておく箱のことです。例えば、自分の人生や家系のこと、親戚で子どもたちの世話をしてくれる人のこと、あるいは世話をしてくれる人に向けてもし子どもが病気を抱えて薬を飲んでいたりすればそうした情報も入れておきます。エイズで若い人が亡くなりがちな南アではとても大切なことで、特に貧困を抱えた家庭などでは、子どもたちが身寄りのないままにならないようにする役割も果たしてくれます。

【下】まずはボランティアたち自身がつくってみようということで実施。なぜこの箱を用意しておくことが大切なのかを話し合うことから始めました。写真は工作中的の様子。

【右】ファミリーツリー（家系図）の書き方を説明するトレーナー。親が早くなくなった際に自分の出自や世話をしてくれる人を知るのに大切な情報です。



2 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援（メモリーボックスづくり）



【下】自分のこと、家族のことなどを書き残しておくノート。「以前、伝統療法師をしていたことがある」などボランティアたち同士が知らない過去も飛び出した。

研修後にこれを完成させるにあたってボランティアたち自身が自分たちの母親や兄弟に話を聞いて、新たな発見をしたケースも多く聞かれた。また子どもを巻き込みながら作成したボランティアも多くいた。

今後はDICにかよう子どもに関する調査のための家庭訪問時に子どもの家族や子どもたち自身に伝えていくことが期待される。

（特活）日本国際ボランティアセンター

2 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援（カウンセリング研修振り返り）

■2014年2月 振り返り

2月にカウンセリング研修の振り返りを行いました。またメモリーボックスづくりの宿題が出ていたためそれを確認しました。



【左上】全員がメモリーボックスを作ってきました。家庭の事情で研修に参加できなかったボランティアもつくっており、メンバー内で情報共有している様子も確認されました。



【右上】ファミリーツリー（家系図）を写真でつくったボランティア（右）。家族や親戚の写真を貼って誰が誰なのかわかるように裏に書きました。多くのボランティアが自分たちの母親や親族に相談しながら作成し、自分たち自身が家族の知られざるヒストリーを発見する機会になりました。子どもと一緒に作業したというボランティアも多くいて、次世代へと情報が受け継がれていきます。

【左】振り返りでは、研修はボランティアが自分たちの役割を認識する機会となり、子どもや地域の人々との関係性を改善、さらなる信頼関係を築くきっかけとなったことが確認されました。またカウンセリング研修で学んだことによって、まず自分がどのようにストレスや心の負担を解消するかを学び、実際に役立ったというボランティアも多くいました（実際に以前とは顔つきの違うボランティアがいました）。そのことで子どもなど他社を受け入れる心構えができたということです。今後はこうして学んだことが子どもたちために活かされていくことが期待されます。

（特活）日本国際ボランティアセンター

研修終了式

■2013年11月

11月26日、これまでの研修の修了式を行いました。各プログラムが相互に協力しあうことの大切さや、普段は9村に分かれていても同じ組織で活動してもらうことを意識してもらうことをねらって、在宅介護および子どもケアプログラム合同で9村のボランティア全員が参加して開催しました。



修了式ではボランティアたちから研修を提供した本事業への感謝の言葉が述べられました。開催したマガンゲニ村のチーフも参加し「この修了証はあなたたちの学びが終わったことを意味しない。これからが始まりなのだ」とすばらしいスピーチを披露してくれました。左からHBCボランティアのマリアさん、DICボランティアのリジーさん、同じくグラディスさん。マリアさんは学んだことへの感謝と喜びで涙を流していました。グラディスさんからは、在宅介護プログラムが先行して始まり、コミュニティの人びととの関係を築いてきてくれたために後発の活動であるDICの活動がしやすくなったこと、これからも相互に学んでいきたいという思いが語られました。

(特活)日本国際ボランティアセンター

2 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援（子どもの状況把握調査）

カウンセリング研修を受けたボランティアたちから、ドロップインセンターに通う子どもたちの家庭状況の把握調査を実施したいという提案があがりました。JVCと協力して何の項目を調べれば子どもたちや家庭の様子ができるのかを検討し、調査表を作成しました。学校に行けているか、お母さんの様子は（きちんと世話をしているか）、食べ物はあるか、などインタビューと観察によって確認していきます。6月に開始して、これまで3村で85名の子どもたちの家庭を訪問、今後も継続していきます。DICボランティアと子どもたちの親や世話をしている家族との関係構築の機会にもなりました。



3 家庭菜園研修（モニタリングによる指導）

■2013年5月～

4月の後に7月に別の一村でも研修。二村での研修参加者23名全員が菜園を作り始めたことが確認されました。学んだことが定着するためには、日々の実践の定着が重要であるためトレーナー2名とファシリテーターによるモニタリングを実施しました。



（特活）日本国際ボランティアセンター

3 家庭菜園研修（有機堆肥研修）

■2013年10月

21名を対象に有機堆肥の作り方について研修を実施。この地域ではすでに鶏糞や牛糞など家畜の糞を畑に入れていている人が多いが、家畜の糞は購入が必要なのに対し、有機堆肥は初期投入だけで、あとは家庭の食事のあまりや野菜くずなどを入れてコストが抑えられることや直接的な投入よりも土への作用が軽く、管理が軽い。また庭先で作ること牛糞などのように遠くから買って運ばなくていい、といったメリットがあることから研修を実施した。



研修後、実践している人の数はまだ少ないため、今後のフォローアップが必要とされている。

（特活）日本国際ボランティアセンター

3 家庭菜園研修



【上】ファシリテーターの一人、フローレンスさんの畑。8月の写真。南アでは8月は冬季&乾季で通常農業はできないといわれているが、学んだことを実践していると一年を通じて食べ物が得られる。フローレンスさんは研修前（左）にもメイズなどを植えており農業の経験はあったが、研修後に有機農法を取り入れて実践し始めた。左下は同じくファシリテーターのネリーさんの畑。



【右下】ボドウェ村のサルミナさんの畑。研修では狭い範囲でも生産性の高い畑が作れることを学んだ。サルミナさんの畑は写真のように一本の畝で狭いがこの畑だけでトマト、ビートルート、たまねぎ、かぼちゃ、にんじん、ほうれん草、メイズと7種類のものが取れる。

2014年2月現在、研修を受けた23名中（ファシリテーター除く）13名が家庭菜園づくりを継続している。残り10名のうち仕事のために村を離れて中断した人が多くいる。これまでファシリテーターに対象者を選んでもらっていたが、今後は話し合っ対象者を戦略的に選んでいくことも課題。